
士郎in外史

真の字

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

士郎in外史

【Nコード】

N5840H

【作者名】

真の字

【あらすじ】

英霊となる契約をしてしまった士郎それを認めず救う凜並行世界にとばす大師父並行世界であったのはもちろんあのお方

霸王との出会い（前書き）

正直自分の偏見とか入ってます。
士郎激強にしたいとオ持てます。

漢字の変換の都合でひらがななどをつかいます。

1里＝訳500メートルらしいです。ご指摘ありがとうございます。

最後にあえて言います！！

『これは僕の思いつきによる二次創作でありゲームやアニメの続編ではありません！！』

よって

設定の違いが出てきます！！これを考慮してもあまりにおかしいと感じたところがあればアドバイスをいただきたいです！！早めに対応します。

霸王との出会い

小説を書くのは初めてなのでどうか生温かく見守ってください。 m

（――） m

それはいつか見た赤い丘、無数の人々の死骸、突き刺さる剣

そう、それは最後の瞬間

「フツ、私も無限に至ってしまった1なのだな」

そこに立つのは運命の夜よりもたくましく、より英霊エミヤに近づいた士郎だった。

「ああ最後にみんなに会いたかった、自分勝手だが…」

「本当、士郎は自分勝手よね！まさか死にかけてるだなんて、私がないと本当にダメなんだから」

「なっ」

士郎の前にはあの日、運命の夜とともに戦い恋仲でもあった遠坂凜だった。

「遠…坂、なんでここに？」

「っ 最初はあるたを連れ戻そうと来たわ、けど協会に目をつけられたあんたじゃ…無理みたい……」

そう士郎は度重なる戦争、紛争において介入をしていたのだ、さらに悪いことに秘匿されるべき魔術を使っていたために協会に目をつけられ封印指定にまでなっていた。

「そっか、ありがと遠坂迎えに来てくれてうれしいよ、でも俺も封印指定がかけられた、みんなには迷惑をかけたくないんだ。けどどこにいても愛していたよ遠坂」

優しい笑顔で答える士郎。

「あんた馬鹿よっ何でもつと自分を大事にしないの！……何で傍にいてくれなかったのよ」

そついうと遠坂は泣き崩れてしまった。

罪悪感と遠坂の泣いている顔を見たくない士郎が声をかけようとするが

「遠さk」

「やれやれ、ずいぶん時間がたつたんで見に来てみたら」

そつ言つて出てきたおじいさんは遠坂に近づいて行つた。

遠坂も顔をあげきずいたようである。

「だつ大師父！ はっ恥ずかしいところをお見せしました！！」

” なつ大師父だと！！ということは、まさか！！…遠坂は根源に至つたのか”

「よい、おぬしの気持ちはわからんでもない、こつ長生きすると別れもあるのでは」

「ありがとうございます。」

「さて、おぬしが士郎君であつてゐるかの？」

「はい、俺が衛宮 士郎です。」

という興味深げに俺を見だす大師父……” なんか大師父から魔力が感じられる”

「ほう、面白いな現代の英雄といったところかの？ ふむふむ

なんと固有結界のつかいてとは！」

「っ！！！」

さすがの大師父でも驚いたようだ。しかしもつと驚いたのは士郎本人である。

なにせ自分の秘密をことごとく知られたのだ。驚いて当然である。

「だ、大師父 土郎は、その…」

「大丈夫じゃわしは時計塔のやつらのように腐ってはおらんからの、それで、もう別れは済ませたかの？」

「最後に一言だけいわせてください「よかろう」土郎あんたのこと私も愛していたわ。っ…げんきで幸せになりなさいよ！…っ」

泣きながら走って行ってしまった。

「どういうことか説明してくれませんか？ なぜ最後の別れのようなあいさつか」

予想は宝石翁と知った時についていた。

これは疑問ではなく確認だ。

「おぬしも気づいておろうが、おぬしを確実に並行世界へ飛ばすからじゃ」

そう、この世界ではすでに彼の場所はないだろう。なにせ魔術協会だけでなく近々教会も動くという情報が出てきているのだから。

「それは遠坂に頼まれたのですか？」

「まあ弟子じゃしもう、じゃが遠坂の娘は細かい調節がきんののでな、あと個人的におぬしに一目会ってみたいとおもったのじゃ。…

…ではそろそろ時間じゃ、最後に何かあるかの？」

そう、遠坂は根源に至った。しかしまだまだ調整がなっていないと
のことで、大師父の下で正式な弟子として師事しているのだ。

”細かい調整？……ただ飛ばすだけではないのか？？ まあいい、それよりも最後の一言か”

「ではみんなに…」今まで迷惑かけてごめん”とだけ

「賜った。では始める」

そう言って取り出したのは、宝石剣ゼルレツチであった。

これを見た瞬間、俺の意識はブラックアウトした。

「…ッ よもやこの宝石剣をも取り込むとは！、やはり面白のう！
では行くがよい！！」

すると宝石剣よりでた光があたりを埋め尽くしていく。その光を見ながら遠坂は泣いていた。

「バカ、…絶対会いに行つてやるんだから」

そう、新たな決意を胸にいだきながら

「うつ ん はつここは…どこだ？ 町が、ないのか あれは、

山！？ここは、荒野！？ いったい俺はどこに飛ばされたんだ？」

目を覚ましたのは遠方に山々が見える広大な荒野。

” までよ、この地形は見たことがある！？…… まさか、中国か！？ ”

考えても仕方ないとばかりだ、と思い直し次に自分の体に異常がないか確かめる。

「解析開始>>トレース・オン<<」

”…よし問題はなさそうだな、んっ！これは…世界との契約が切れているのか！？

なのにこの魔力量なのか…… はっ大師父の細かい調節とはこのことか！？”

そう宝石の翁は世界からの契約に縛られないように特殊な並行世界へ飛ばしたのだ。

新たな世界を創らせて…

そう考えに没頭していると何人かが走って近づいてくる気配がした。

「までこらー！！」「まつんだな！！」「ひっひっひっ」

「きゃーたすけてー きゃっ」

どうやら少女が3人組の盗賊？から逃げてきたらしいだが躰いてしまいピンチだ。

「てこづらせやがって!!」「もうにがさないんだな」「アニキ早く犯っちまいやしょう」

もう駄目だと思って目を閉じた瞬間…

”ふむ、距離は約3キロといったところか、ならば…投影開始>>トレース・オン<<”

弓を投影し矢を引き絞り、3本同時に放った。「ハッ!!」

「ぐあ」「っ」「ぎゃっ」

結果、3人とも軽傷以上重症以下の矢による怪我をし、意識を失っていた。

「えっ…な、なんで？」

「大丈夫か？」

現在の時間にして2分か3分ほどしてからだろうか、呆然としていた少女の前に現われたのは、赤い見たこともないような服をきた長身白髪の男だった。

「あ、あの あなたが助けてくださったのですか？」

「ああ間違いない俺が彼らに矢を射た、それよりも大丈夫だったかい？」

「あつ、はい!!ありがとうございます」

「ならいいんだ、さて家の人心配するだろう、早く帰ってあげるんだ」

「はいっ!!本当にありがとうございます!!」

そうい少女は自分の家の方向へ走って行った。

士郎は視覚を強化しその少女の行く先をみて小声で言った。

「あの町並から察するに、やはり過去もしくは、それに似た世界なのだろう」

そして士郎は岩陰を見ながら言った。少々時間がたち出てきたのは3人の少女であった。

”何者だ？この少女たちは、特に槍をもった子は注意が必要だ”

「いやはや流石ですなよやみつかつてしまうとは、私は趙雲」
槍をもった青髪の少女が言う。

「いつからみつかつていましたか？おお私は程立といえます」
頭に何かを乗せた金髪の少女が尋ねる。

「私たちは敵ではありません。失礼、私は戯志才」
眼鏡をかけ茶色がかった髪をした少女が今欲しい言葉をくれた。

”なんでさ！　まず趙雲って言ったら三国志の武将じゃないか！！
ってことは、ここは中国でしかも時代をも遡ったのか？　確定なのか”

心で思ったことを表情や言葉に出さないようにしながら士郎は問う。
「で、何か用かね？ないのならないでいいのだが、私からも質問を
させていただく」

この世界について知りたい士郎はいろいろ聞きたいことがあったのだ。

「いや、私たちも襲われている少女を助けようとしたのだが、貴殿
に先を越され出るにでれなかったのだ」

そう彼女たちも少女が襲われているところを見つけ、助けようとしたのだ。

「そうなのでしょにしてもお兄さんどこから矢を？　風にはみえな
かったのですよ」

「そうですね、私もその疑問をもちました。いったいどこから？」
それは当然の疑問である、なにせ趙雲ですら最初は気づかなかった
のだから。

「なに、7里ほど先からだか？」

当たり前のように話す士郎。（しかしそれは士郎の中での常識ではない 汗）

「「なっ」「ぐ」」

「寝るなッ！風！！」

「おおっ！ すみませんねゝあまりにも信じられなかったので
どうやら寝てしまうのが彼女の癖らしい

”やはりこの御仁…強いな”

「ですがなぜ殺気もなしに射ることができるのですかな？」

誰しも射るとき切るときは殺気がでるものだ、しかし士郎は殺気を
出していない

「なに、もとより殺す気などなかった、あるのは無力化するという
考えのみだ」

「なんと！あの距離から正確に中てる気でいたのか？不可能だ！！」

「でも実際に中つているのですよゝ稟ちゃん」

「りん？」

懐かしい名前を聞き、うつかり士郎が口にした瞬間 ジャキィ！

武器を構えた趙雲から殺気がでていた

「貴様っ！！稟の真名をいきなり口にするとは、許さん！！」

「なっ待て！私が何をしたというのだ！！」

「聞く耳もたん！！はぁーーーー！！！」

士郎に容赦なく槍が迫っていく。仕方ないと思いながら士郎も応戦
する。

「投影開始>>トレース・オン<<」

もちろん怪しまれないように外套に手を忍ばせてからの投影だ。

干将・莫耶を投影して打ち合う ギャン！ ギン！ ガッ！
ガキィン！！

一際大きい音の後には手に槍を持っていない趙雲がいた

「まさか…この私が…近距離で負けるなんて」

士郎が得意なのは、遠距離と思い込んでしまったことによる敗因でもあるが、自分の誇る武がたったの数合で負けたのだ。
落ち込まない方がおかしいというところ。

「質問をしてもいいか？」

いつの間にか助けた少女はいなくなっていた、だから手がかりは彼女たちだけだったのだ。

「くっ　なんだ？」

悔しげに趙雲は声を上げる。

「まず、君たちがいう真名とは一体何なのだね？」

「…えっ」「…どういうことでござろう？おぬし真名を知らないのか？」

この質問に彼女たちは当たり前前のことを聞く士郎に違和感を抱いた。
「ああ私は異国のものらしいのでな、この国のことがあまり分らないのだ」

「…！…！」「…」

遠くの国、というより真名のない国を知らない彼女らならではの反応だろう。

「ならばどこから来たと申すのだ？」

「隣の国で日本という国だ」

「どこですかそれは？」

「ぐ」 「寝るなっ」

「東の方向に海を渡ったところだな」 「おお」

ある程度ここが中国であると認識したために言えたことだ。

どどどど

「風は話に参加できなくて

暇なのですよ」

「そうなのか、ふむ手助けしたいところだが時間がないようだ風、稟、官軍だ！行くぞ」

「わかったのです〜ではお兄さん」

「失礼します」

去り際はあざやかである。

「むう、質問に答えていないのだが」

と士郎が途方に暮れていると…

どどどどどどどどどどどどどどどどどど

軍隊がきました。

「全軍とまれ！！」

いきなりの軍に驚いていると前方にとても凛々しい女の子が出てきた

”フツ セイバーに似ているな”

「あなたはなにものかしら？」

これがかの英雄と霸王の出会いだった。

霸王との出会い（後書き）

正直初めての作成に当たりうまくできていないかもしれませんが。

できれば文字の間違いなどの修正点があればあしえていただきたいです。

どうぞよろしく

距離について訂正があります。一里は中国では500メートルでした。

（400メートルは朝鮮でした。ういきより）

お誘い（前書き）

いろいろキャラの性格などを変えていきますので
ご了承ください。

お誘い

side 士郎

「フツ、いきなり現われて「何者か？」とはな…まあいい、私はエミヤというものだ」

”この子タダものじゃないな、いったい何者だ？”

いきなり何者かを問われ無難にエミヤとだけ答えた。

「エミヤと言うの？変わった名ね、私の名は曹S…」

「貴様っ！華林様を笑ったな！？殺す！！！」

あああ、名前を聞けそうだったのに、きつと今の名前も真名なんだろうな。

一人で出てきた少女の後ろに遅れて一人黒髪の女性が顔を怒らせてやってきて

いきなり飛びかかってきました。はい（汗

「まあ待て姉じゃ、華林様が姉じゃを睨んでいるぞ？」

その飛びかかってきた女の子をギリギリで止めてくれたのがさらに後からやってきた青い髪の女の子だ。

「ふえ？華林様、私何かしましたか？？」

この女の子は全くわかっていないようである。

「はあ…春蘭、帰ったらお仕置きよ」

春蘭と呼ばれた女の子はしょんぼりとしてしまい、彼女を姉と言う女の子に慰められている。

けど、なんか慰めているのになんか嬉しそうだ。

この子たちの態度などから考えるに、あのセイバーに感じの似た子が主のような位置にあるのであろう、と考えたうえで話をするか。

「ちょっと聞きたいことがあるのだが、いいかね？」

何を聞こうか…やはり第一に会話をするには名前を知ることが必要だな。

他にはここがどこなのかということ以确定した情報が欲しい。

などと考えながら声をかける。

「ええ、何かしら？…それと わが名は曹操 字は孟徳 好きに呼びなさい」

あっさり何個か問題が解決されちゃいました。

「ありがとう曹操、まずここってどこなのかな？」

「ここ？ここは陳留よ」

むっ気が緩んでしまったのか昔の話し方に戻っているな、まあいい。この子と話していると何か特別な感じがするな。

ていうか陳留って……もう確定かなorz

「華林様少しよろしいですか？」

青髪の子が話に入ってきた。

「ええ、何かしら？秋蘭」

「はい、このエミヤに聞きたいことがありまして」

「許可するわ」

なんか俺の意思って無視だよねorz

「では、わが名は夏侯淵 字は妙才だ、質問をしてもいいかな？」

おおなかなか良識人っぽいぞ。

「いいよ夏侯淵、答えられる範囲でなら」

「では、この3人を討ったのは貴方か？」

なるほど、彼女も弓を持っているだけはある。

あの矢の刺さっている部分は3つとも紙一重で急所を外しているのをみたのだろう、驚愕の顔をしていた。

「ああ俺だ、少女を襲っていたからな」

きつと次は弓を見せてくれと言ってくるだろう。

今俺をただ見ただけでは、武器など持っていないように見えるのだから。

「そうか、できれば弓の方を見せていただけないだろうか？ あんな精密な射のできるものだぞ素晴らしいものを使っているのだろう??？」

俺は少し考えるそぶりをしながら手を後ろに持っていく。

さも後ろに弓があると思わせながら。そして聞こえないように細心の注意を払い

「トレース・オン」

もちろん注意をあまりひきたくないから宝具ではない、ある程度良い弓だ。

「そう良いものでもないって、ほらこれだけど？」

「なっこれはただの弓ではないのか!？ この弓であのような精密な射を??？」

驚くのは無理ないか、見たところ彼女の武器は自分専用なのだろう。

それに比べ俺が見せたのは良いものであると、ただの弓なのだ。
やりすぎたかな？ もつといい弓にすりゃよかった。orz

……それはさておきそろそろ話にポロが出てしまつたろう早急に話題の転換をしよう。

そう、俺はあくまで士郎だ、アーチャーのような口のきき方はまだ慣れていないしなれたくない。

「まあその話は置いておいてさ、この3人どうするのかな？ できれば殺しはしないでほしいのだけど」
これで話題よ変わってくれ！！

「そうね、この手柄は本来貴方のものだからあなたがそういうならそうしましょう」

曹操が受けてくれて助かった。

そして、また人を救うことができた。

「そういえば遅れてしまったけど礼を受け取ってくれるかしら？
少女を助けてくれたんですってね？ 本当にありがとう」
なんと魏の王に頭を下げられました。
ぶるっ

なんか彼女の少し後ろから、殺気や嫉妬の入り混じったものにぶるつたのは内緒だ。

「あつ頭をあげてくれ！ そんなたいしたことじゃないから！！」
流石に焦る、いきなり王に頭を下げられたのだ。

普通の人なら卒倒しかねない。(汗

「そう、でも礼の言葉は受け取ってもらうわ！！」
なんていうか、いい子なんだろうな曹操は。

「わかった、礼の言葉いただいたよ、どういたしまして」

「次の質問なのだが、真名ってどんな意味があるんだ？」
「やつと聞いた。さつきいきなり襲われたから軽いものではないと分かったが…」

「なっ！ 真名を知らないの！？」
「3人ともが驚いている。やはり当たり前のことでおかつ大事なことからしい。」

「貴様バカか？ 真名とは親からもらう聖なるものであろう！？」
「何やら抽象的だがそんなものだろう。」

「あつと……君は？」

「私は夏侯惇 元讓だ！！」

そんな感じに聞いていき最後にこのような当たり前であろう質問を試してみた。

「ちなみに今の皇帝は霊帝でいいかな？」

「そうよ……ねえ、あなたそんなあたりまえな事を聞いて何になるというの？」

「そうか、並行世界でしかもタイムスリップしたのか俺。」

さて、この事実を言うべきか言わないべきか………

靈帝のことなんて当たり前のことを聞くわね、と思ったら急に黙るなんてどうしたのかしら？

それに、これは人なの？ 濃密な威圧感などが彼の体からあふれてきている。

おかげで兵たちは怖気づいてしまっている。

今までは意識して抑えていたのだろうかというほどだ。

しかし、私は曹孟徳、余裕の表情は崩さない

「エミヤ話の途中で考え事は無礼だと思わないかしら？」

「あつ、ああすまない、自分の置かれた状況に納得しかねただけだよ」

なにかあつたのだろうか？

これは私の興味の問題だがなぜか聞かなくてはいけない気がした。

「何があつたか教えてくれないかしら？ あなたほどの人がなぜそんなに困っているのか？」

「あなたほどの人？……ッ！……」

自分から流れ出ていたものに気付いたのか抑えてくれた。

「すまない、どうやら抑え切れていなかったらしいな、本当に申し訳ないことをした」

私の言外の意に気付いたらしい…鋭いわね。

でも、頭を下げて謝っているのを見ると悪いものでもないらしい

「いいわ、でも兵達が心配だから話は城に帰ってからでいいかしら？」

これはあなたを城に連れていく方便、さあどうするエミヤ？

「わかった、じゃあ案内してくれないか？ 俺は地理にくわしくな

いからな」

こうもあっさり来てくれるとは思わなかったけど僥倖ね。

「さっ城へ帰るわよ！……その山賊達はそのあなた達運びなさい」
山賊達を数人の兵に任せ帰ることにした。

s i d e o u t

士郎の決断（前書き）

大変長らくお待たせしました。
とうとう士郎が魏に！！

士郎の決断

城に着いてすぐ、曹操のお呼び出しがかかったらしく夏侯淵が迎えに来た。

「エミヤ、華林様がお呼びだから玉座まで着いてきてくれるか」
それに対して「ああ」と簡単に答えて着いて行っただ。

どこに何があるのかわからない今は従うしかないだろう。

side エミヤ

「ここが玉座だ、華林様に無礼のないようにな」
ようやく着いたようだ。

正直、規模はあまり大きくないが、
迷路のような作りで一度見ただけでは城の作りはわからないだろう。
ところが俺は解析すれば構造だけだが知ることができる。

このような時には自分の能力に感謝だ。

「ああ、そんなことはわかりきっている」

さて先の曹操の問いにどう答えたらいいものか……

一樣逃げ道も考えておくかな

ギイイイ

扉が開くと曹操と先ほどの夏侯惇がいた。

「おお、やっと来たか秋蘭。待ちわびたぞ！」

「まずは落ち着きなさい春蘭」

曹操が夏侯惇を抑えてくれて助かるな。

side out

どうやら夏侯惇は待ちわびていたのかすこしイライラとしている。

「ああ、姉じゃ」

だがそんな夏侯惇をみている夏侯淵の視線が……怖い

その様子をさも当然と玉座に座る曹操は視線を士郎に合わせる。

side 曹操

「さてエミヤ、先ほどの問いに答えてくれるかしら？」

彼が、彼ほどの人がどのようなことに苦しんでいるのか。

私はとても興味を持ってしまったがために聞いた。

「ふむ、話せば長くなるが良いかね？」

さて、彼はどれほどの事に遭っているのか。

勿論虚実はできる限り見極めるつもりだ。

……だが話を聞いて行くうちに彼がこの世界の者でないことを知った。

そういえば霊帝のことも聞いていたし真名も知らなかった。

まあ筋は通っているわね。

でもこの世界に真名を知らない人間はいるのだろうか？

いや、そのようなことを考えていては、何一つ信じることができなくなる。

それに彼の眼には狂気など含まれていない。

何よりまっすぐだ。

「大体の事情はわかったわ、それに管路の占いのこともある」

「華林様、そのようなものを信じてもよいのですか？」

やはり秋蘭は優秀な子ね。

「???何のことだ?秋蘭」

まああの子は今ほおっておきましょう。

「あなたうちに来ないかしら?いえ、あなたが欲しいわ!!エミヤ!」

「かつ華林様!?!私だけでは不満なんですか」

春蘭たら泣かなくてもいいのに

「姉じゃ、華林様が困っているだろう?それに華林様は私たちを大切にしてくれるじゃないか」

「はあ、勿論あなた達はとても大切よ、ただこの話は別物なの」

そう、もしエミヤが他の勢力にいき敵に回るようなことになれば……
何人の被害がでるか分かったものではない。
何としても手に入れなければ!

side out

「ふむ、話せば長くなるが良いかね?」

「まず、この話を聞くにあたって質問を最後までしないでもらいたい」

「「「わかった(わ)」「」」」

「では、まず私は未来から来たらしいw」

「どういう意味だ?」

夏侯惇はお構いなしに質問する。

「春蘭、命令よ少しの間口をきくのをやめなさい」

曹操曹操にしてはなかなかにきつい言葉。

「か!?!華林様!?!」

自分の何がいけなかったのかわからずにお叱りを受けたので
涙目になりながら命令どうりに黙った夏侯惇。

正直かわいい

「気を取り直して、私の世界では君たちの生きていた時代は、1000年以上昔ということになっている。

そして曹操や夏侯惇、夏侯淵は男として伝えられている。

これは私の時代で三国志という名の歴史書で知られていることだな。
な。

かく言う私もその三国志を読みある程度のことを知っているにすぎない。

という世界に私は来てしまったらしい。

まあ理由としては私が悪いのだから、その話も少し聞いてもらおう。
最初に言うが私は魔術師だ。

先ほどの弓や矢は私の魔術によって作られたもの。 と言えば納得かな？

.....

ということとで私のいた世界は魔術や魔法といったものがあるのだ。
そして私はその魔法により九死に一生をえてこの世界に来たらしい」

士郎は自分のことをすべてではないが、嘘は含めずにはなした。
中でも今後のために魔術というものはどんなものかだけ軽く説明を

しただけだ。

もし、固有結界のことまで話したら皆正気ではいらなかっただろう。

そのような危険要素もあるためこの説明は、むしろ気配りとすら言えるだろう。

「正直信じられないわ、でも貴方は嘘を言っているような眼をしていない。

ということには信じるしかないということかしら？」

流石は曹操だ。

納得はしていないようだが、ほとんど内容を理解しているようだ。

他の人間は……夏侯惇はまったく頭に入っていないようだ。

夏侯淵は夏侯惇の観察に忙しいようだ。

『大丈夫なのか？ここ』

と士郎は心の中で思ったとか

「あなたうちに来ないかしら？いえ、あなたが欲しいわ！！エミヤ！」

あのような話を聞いてなおまっすぐな目をしている。

しかし、打算も含まれているのだろう。目でなく顔に出ている。

そんな曹操をじっくり見てから

「フッフ良いだろう！曹操、君を我が主とすることを誓おう！」

士郎の決断（後書き）

すごく書きづらくなってきました（汗
でもできる限り頑張ってみようと思います。
ちなみに真名は次回です。（-。-）y-。
。
。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5840h/>

士郎in外史

2010年10月12日02時13分発行